

花王教員フェローシップ『太平洋北西部のサケ』体験報告書

■ 報告者：馬場雅子(神奈川県・横浜英和小学校教諭)

□ 調査日：2004 年 7 月 31 日～8 月 6 日

1) プロジェクト内容

7 月 31 日 (土) 1 日目：〔午前〕 集合 プレゼンテーション 宿舎へ移動

〔午後〕 レクチャー

調査地 North Fork Sauk River で調査方法を実際に目で見ながら、説明を聞く。

8 月 1 日 (日) 2 日目：〔終日〕 調査地 North Fork Sauk River で、川の測量。

川の様子（石の大きさ・流木など）の調査。

作業終了後、氷河見学と原生林の森探検。

8 月 2 日 (月) 3 日目：〔終日〕 調査地 North Fork Sauk River 南の森の樹木の測量。

生息している植物の種を識別する。

作業終了後、North Fork Sauk Falls と、ネイティブアメリカンの居住地跡を見学。

8 月 3 日 (火) 4 日目：〔午前〕 宿舎清掃。2 番目の宿舎 (Arn's House) 移動。

途中、ネイティブアメリカンの墓地、ダム見学。

〔午後〕 調査地 Nookachamps creek で、調査方法の説明を聞く。

8 月 4 日 (水) 5 日目：〔終日〕 調査地 Nookachamps creek で、生息植物の調査。

8 月 5 日 (木) 6 日目：〔終日〕 調査地 Nookachamps creek で、生息植物の調査。

Skagit River の河口を見学。

8 月 6 日 (金) 7 日目：〔午前〕 解散



Photo: © Masako Baba

2) プロジェクトの体験とそこで学んだこと。

①調査地 North Fork Sauk River(上流域)にて

澄み切った North Fork Sauk River に初めて足を入れた瞬間、なんともいえない感動を味わった。穏やかな水面に一歩踏み込んだとたん、すくわれるような力強い流れが圧力となって両足にはつきりと感じられた。太古の昔からこの流れをたどって海へ、そしてまたこの地へ、魚たちは行き来したのだ。

いよいよ上流での調査が始まった。原生林に囲まれたこの調査地では、川の測量や川石、流木、植物の状態の情報を集めた。勿論、英語で行われるレクチャーでは、何をするのか、何をすべきなのか、私は理解できず、皆の様子をじっと伺っていた。川幅を測るらしいとわかったのは、スタッフの一人が川幅に満たないメジャーをなんとか2つより合わせて、計測作業の用に足りるようにと必死になっている姿を見たときで、なんともユニークな光景に緊張がいつきに解けた。



距離・方位・傾斜度を測り、記録する

1つ目の作業では、メンバー10人全員で取り組み30分以上かかってしまい不安になった。しかし作業が進むにつれ自然と、3~4人ずつのグループに分かれて作業は行われるようになり、手際もよくなっていた。私のように英語が少ししか話せない者は、計測数値を聞き取ることも、読み上げることにもままならない。新しい仕事をするには内容を理解するのに時間もかかる。こんな私でも、Dr.Riley のリーダーシップのおかげで、後半にはしっかり調査活動をしたという実感を得ることができた。

②調査地 Nookachamps creek(下流域)にて



Nookachamps creek



アンカーでとめられている流木



この流木もこの形でとめられている

この調査地は、現地のNPOが川を復元するために買い上げた土地で、100年ほど前までは牧草地として使われていた。どんな植物が、どこに植えられているか、木の高さや状態はどうか、ということ調査するのが、ここでの目的だった。ボランティアによる植樹も行われているとのことだった。ここでは、開拓当時流れをまっすぐにしてしまった川を、もう一度昔のように蛇行した川に戻すということが行われている。勿論、洪水などによる自然の力で戻すのである。自然の力で再生するのを見守り続けるという根気のいるプロジェクトだ。不要なダム、ショートカット、三面張り、砂防ダムなどで自然をコントロールしようとしている日本の現状とは、発想から異なり驚かされた。

唯一人間の力が加わっているのは、洪水でながれついた流木を、アンカーでそこに留めおくという作業で、まるで森のオブジェのようだった。川にはサケの稚魚たちがいた。稚魚たちが住みよい環境に少しずつだが、戻ってきているのだろう。

③国際チームの一員となって

Dr.Riley、研究生 Karl、そしてボランティア 8 人。これが、今回のチームメンバーだった。私たちはいつも行動を共にしていた。夕食前後の作業がない時間も、メンバーは吸い寄せられるように集まり、団欒を楽しんだ。

食事作りは、10 人が協力して行う。しかし、当番を決めることはなかった。「今日は、私が作るわ。」「皿洗いは、ぼくに任せてよ。」という具合に役割が決まっていくなのだ。このように指示されることなく、私たちが自然に動けるようになったのは、Dr.Riley と研究生 Karl の行動



夕食後、折り紙を楽しむ



Arn（中央男性）の家で夕食を作る

からだろう。彼らは初日の夕方、私たちがくつろいでいるときに、もくもくと夕食を作ってくれた。夜は、最後にシャワーを浴びてテントで寝る。朝は、誰よりも早く起き朝食作り。おいしいパンケーキを鼻歌まじりに焼いてくれた。

調査活動においても、この生活面においても、指示されて行うのではなく、自然に私たちがよい方向に動けるよう導く力。これは、なんとも心地よい。Dr.Riley が教えてくれたこの方法を、私の教室でも生かしていきたい。

3) 今回の体験が学校教育にどのような意味を持つか。

『自然のすばらしさを感じ→好きになり→大切にしようと思う。』このつながりを体験することが、環境教育の第一歩だと、私はいつも考えている。

子供たちが自然に目を向けアンテナを張ろうと思うきっかけは、教師の言葉かけひとつ。これは、今までの経験から私が感じていることだ。私がアースウォッチのプロジェクトに参加を希望したのは、その言葉かけの幅をぐっと広げることが目的だった。

今回のプロジェクトから私が学んだことを一言で言えば、「自然は自然自らが望む状態に戻す。これが 1 番。」ということだ。

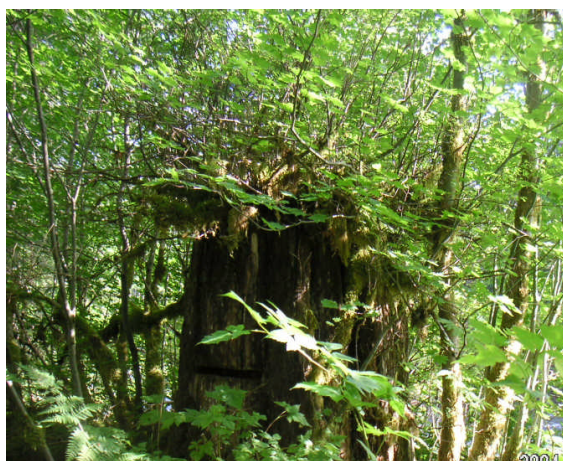
North Fork Sauk River(上流域)では、川をきれいにするために、流木や倒木を全て排除していた時代があった。しかし、それがサケの産卵場所をなくし、サケの減少に結びついているということがわかってきた。今回の調査では、どこに流木や倒木があるかということもしっかり記録した。今後の調査では、そこにサケがどのぐらい産卵するかが記録されていくことになるだろう。

原生の森の中では、自己再生の力がしっかりと働いていた。倒れた木からは次の世代の小さな木が生え、私たちが踏みつけている落ち葉も、窒素を定着させるという重要な役割を担っているとい

うことだ。人間が自然と共生していた時代に、木こりたちが倒した木の切り株にも、その子どもたちの姿があった。私はここで体験した自然の本当に望む姿を、子どもたちに伝えていきたいと思う。



倒木更新（倒木の上で発芽した稚樹が育っていく現象）



蘗：ひこばえ（木の切り株などから出てくる小さな芽）

下流域の元牧草地に植えられた幼木を見ながら調査を進めているとき、ふと浮かんだ一つの幸福なストーリーが私の心とらえてはなさなかった。——サケを守るために川を昔のように戻したいと考えた人々が、土地を買い、植林を始めた。そして、森を復元させようと、町の人に呼びかけた。町の住民は、思い思いに自宅の庭にあった苗木や、思い出の木を持ち寄り、この場所へ植えた。そうして一つの森ができあがった。——このような、センチメンタルな光景が頭に浮かんだのも、川や森の大部分がわれわれの手元を離れ管理されている日本の自然に比べ、ここの森は、地域の住民の思いがしっかり実を結んだ森になる温かさを感じたからだろう。



Nookachamps creek の元牧草地には、幼木が根付いている。



Karl と Dr.Riley と一緒に、幼木の名前を調べる

日本国内において夏休み行われている多くの研修会は、2 学期からの授業にすぐに生かせる具体的な内容のものがほとんどだ。このアースウォッチのプロジェクトは、環境教育の本質を知ることができることと、グループワークにより教師自身が人間として成長できることが魅力だ。アメリカでは、年間 500 人以上の教師がアースウォッチのプロジェクトに参加しているという。このような研修が、日本教育現場にも定着することを願う。